科学研究費補助金基盤研究（A）2012年度研究成果報告書　　課題番号　22242010

日本古典籍における
【表記情報学】の基盤構築に関する研究　Ⅱ

The project for establishing the foundations of "Methodology for the studies of the notation"
in the classical Japanese literature

研究代表者　今西　裕一郎

科学研究費補助金　基盤研究（A）「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」　目次

研究概要・研究組織 …… ●

活動報告 …… ●

I　論文編

表記情報から見る書写者の意識　―京都大学本『紫明抄』二本から― …… 田坂　憲二 ●

無跋無刊記整版本『源氏物語』の本文と表記 …… 田村　隆 ●

紫式部集古本系表記考　―「かへし」「返し」「返」― …… 横井　孝 ●

国文学研究資料館所蔵『源氏物語』（絵入源氏物語）画像・翻字資料について …… 阿部　江美子 ●

「絵入源氏物語」若紫巻　表紙・冒頭部分画像 …… ●

源氏物語諸本間における仏教用語の表記法をめぐる基礎調査（横書き） …… 上野　英子 ●●

II　国際研究集会編

イタリア国際研究集会　ポスター・当日の模様 …… ●

仮名文テキストの文字遣　―鎌倉から江戸の源氏物語を通覧する― …… 中村　一夫 ●

『和泉式部日記』の文字表記 ……伊藤　鉄也 ●
写本における「无」文字消長　―藤原定家自筆本を中心に― ……坂本　信道 ●
和歌を仮名で書く事についての一考察（横書き） ……アルド・トリーニ ●●
表記情報学としての平仮名本と片仮名本（横書き） ……今西　裕一郎 ●●
イタリア国際研究集会　プログラム ……●●

Ⅲ　資料編（付録ＤＶＤ）

人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵―『源氏物語』（絵入源氏物語・承応三年版）画像・翻字資料

＊表紙　人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵
『源氏物語』若紫巻（絵入源氏物語・承応三年版）カラー口絵
＊●ページ画像　人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵
『源氏物語』若紫巻（絵入源氏物語・承応三年版）若紫巻　表紙・冒頭

謝辞　Acknowledgement
本研究はＪＳＰＳ科研費２２２４２０１０の助成を受けたものです。
These works were supported by JSPS KAKENHI Grant Number 22242010.

研究概要・研究組織

和歌を仮名で書くことについての一考察

Aldo Tollini

一

古代日本には漢文、漢文訓読、漢文混交語、音声言語（列島語）などが同時に存在し、これらは場面、階級、場所などにより使い分けられていた。つまり、「多言語併用」という状況に置かれていた。漢文訓読の普及は、多機能な言語としての和文体の発展を阻止し、和文体は文学作品のためだけの文体となり、その他は漢文調の文体で表された。「多言語併用」は話し言葉ではなく、書記言語のレベルであるから、「多文体併用」と言ったほうがいいだろう。文体はテキストの内容、目的、読み手などにより選ばれた。例えば、日記、物語、和歌などの文学の世界では、和文体がよく見られるが学問や公文書には漢文調が優勢であった。「多文体併用」の古代日本のテキストでは、表記または音声言語の「文字化」は大事な役割を果たしているが、表記体による表現の可能性については、いまだ徹底的な研究が行われていないのが現状である。

日本人は初め書記言語は基本的に口頭言語とは一致しないと考えていたが、これは表記の役割をはっきりと理解していなかったということである。平安期に仮名を使用するようになったことは、表記の役割が理解できるようになったことを示している。それまでは、漢文を書記言語として理解していたということであろう。やはり、古代日本の大変複雑で、表現の可能性の非常に豊富な表記の場合、文字はソシュール（De Saussure , 1857-1913) がいうようにただ「記号表現」(シニフィアン signifiant)」、つまり、意味を持たない、表現とはかかわりがない記号であることが古代日本人にとっては理解しにくかったであろう。

二

古典文学のテキストにアプローチする際に、そのテキストの表記体をどのように見るかが大事なポイントになる。なぜなら、書記テキストは音声テキストをただ文字化したものではないからである。アルファベット圏の西洋言語学の理論によれば、表記は音声言語の文字化に過ぎないという単純な考え方があり、表記が軽視されるのが普通である。

しかし、表記が書記言語に与える影響は無視できない。表記により表現も変わる。表記、表現、文体は繋がっており、互いに影響を受けている。これは、あらゆる言語、表記に当てはまることである。もちろん、表記体により表記とテキストの互いの関係や影響が大きくなったり、小さくなったりする場合はあり得る。アルファベット、仮名、漢字に基づいた表記体はそれぞれ文字の形、性質、特徴などによって表現方法が変わる。

たとえば、夏目漱石の小説のタイトルを「こころ」(「こゝろ」)、「心」、「ココロ」、「kokoro」のように表記を変えることで受け取る感じが微妙に違ってくるだろう。仮名で書かれた「こころ」は日本的なイメージ、「日本のこころ」をわき立たせる。同じように、平安朝文学によくあらわれる「あはれ」を「あわれ」、「哀れ」、「憐れ」と書くことにより受ける感じが違ってくる。

漢字・仮名圏は文字の種類が多く、その性質は大きく変わるので、文字の影響はわかりやすいが、音声文字のみの表記体、例えばアルファベット圏のケースを取り上げてみても、同じことが言えるのではないだろうか。たとえば、「Firenze」を「Phyrentse」と書いても発音は変わらないが、もし表記は只音声の文字化であれば、どう書いても差し支えがないはずだが、受けるイメージは変わってくる。仮名書き「フィレンツェ」も同様である。

ここで問題になっているのは、表記と意味の関係で、文字からどのようなイメージがうかぶのかということである。文化や言語の特徴がテキストに大きく影響を与えていることは言うまでもないが、それに加えて表記体の標準化も関係しているということである。

「こころ」と「心」、「Firenze」、「Phyrentse」「フィレンツェ」の例から、人は文字に対してあるイメージを抱いており、文字の美的な側面は別として、文字にはイメージをふくらませる力があると言えよう。「対象とする言語がどのように表記されるのか」というのは、「言語・意味・文字」の三要素が互いにどのように関係し、どのように影響し合っているかということである。「書く」という行為は、文字を使って(特に音声)言語を書き表すという行為にとどまらず、文字を使って何かを表現し、意味を表すという見方が日本古代表記にあったのではないだろうか。

文章のレベルでも同じことが言えるだろう。漢文調で書かれている文章と仮名の多い和文体で書かれている文章が読み手に与える印象は違う。情報中心、コンパクトで冗長のない漢文調で書かれた新聞の見出しと小説の文体を比較すれば、表記の役割はテキストの内容によって違うことがわかる。次に古典文学から取った違いが大きい3例をみてみよう。

1．「万葉集」12/2852

「人言 繁時 吾妹 衣有 裏服矣」

訓読：人言の繁き時には我妹子し衣にありせば下に着ましを

2．「万葉集」15/3695

「牟可之欲里　伊比祁流許等乃　可良久尓能　可良久毛己許尓　和可礼須留可聞」

読み：むかしより　いひけることの　からくにの　からくもここに　わかれするかも

意味：昔より言ひける言の韓国の辛くもここに別れするかも

3．「古今和歌集」18 番歌

「み山にはまつの雪だにきえなくに宮こはのべのわかなつみけり」

1．「人言繁時吾妹衣有裏服矣」

2．「牟可之欲里伊比祁流許等乃可良久尓能可良久毛己許尓和可礼須留可聞」

3．「み山にはまつの雪だにきえなくに宮こはのべのわかなつみけり」

上記の３例の視覚的な違いは一目瞭然である。手書きの文字の美しさ、また例２の「欲里」、「可良久」ように万葉仮名に秘めた意味は別として、表記面は表現には関係ないとはいえないだろう。１では表記体の簡潔さと濃縮した趣のあるさまを、２ではバロック的に余分な情報を入れ視覚的効果をねらい、３ではシンプルで優雅なさまを表現するなど歌の表現や雰囲気に与える影響を忘れてはならない。その影響をいかにみるかはこれからの課題である。

18 世紀にドイツで活躍した思想家ヘルダー（Wilhelm von Herder, 1744-1803）が「言語は国民の考え方と精神の総合でもある」と指摘しているように、言語は思考や精神を形成する。「多文体併用」の古代日本では漢文と和文の間に意味論上の「分裂」(fracture) が生じた[(1)]。ヘルダーのいう「言語」には表記は考慮されていないが、古代日本の「言語」は表記も対象になっていたのではないだろうか。

三

テキストの表記（表記体）を考えるときに、もう一つの観点も視野に入れなければな

らない。それは、文字と表記で言語をどの程度に書きあらわせるかということである。アルファベットの場合、少し調整すれば、どの音声言語でも文字化できるが、漢字・仮名の場合はそうはいかないだろう。漢字または仮名でどの言語が書けるだろうか。またどの程度に口頭言語が書きあらわせるだろうか。「書ける」という意味はやや曖昧だが、ここでは「忠実に書きあらわす」という意味でとらえている。漢字あるいは仮名を使ってイタリア語の文章が書けるだろうか。漢字で列島語が書けるだろうか。または、仮名で漢文調の文章が書けるだろうか。古代日本語を漢字のみの表記体で書けただろうか。[2] 漢字専用時代になにを書いたのだろうか。漢文訓読は日本語（列島語）と言えるのか。古代日本語を書きあらわすのに漢字が適していなかったことは周知の事実であるが、その無理な試みで、異なる言語が生まれたのである。これは音声言語によって表記が変わるのと全く反対に、表記によって言語が変わるということを意味しているが、ここでは詳しく触れないことにする。

話を元に戻すと、文字や表記で何が書けるかということはテキストの作成にかかわる問題である。言語、文体、内容、伝達により使用できる文字とできない文字、適している文字と適していない文字がある。特に日本で書かれたテキストの場合、文字や表記の選択はある程度限られていた。漢文調の文体では漢字が多く、和文調の文体では音声文字が多く使われているのは必然的にそうなったからである。和歌が木簡時代からよく音声文字で書かれた理由は、やはりその文字類だけで音声列が忠実に文字化できたからである。

四

以上のことを念頭に入れ、表記 (体) の歴史の立場から平安初期の『古今和歌集』の書き方を検討したい。歴史的な立場から、仮名専用表記がそのときに固まった理由やそれまでの移り変わりについて考察したい。

『古今和歌集』は周知のように最初の勅撰和歌集であるが、転換期の作品でもあり、それまでの和歌の形を生かしながら新しい和歌の世界を開拓していった。この時期に和歌の文法、語彙、修辞法はもちろん表記体も確立し平仮名主体で書かれるようになった。そしてこの形が後代の和歌の基となった。日本古典文学では、黎明から散文と韻文の文体（それに含まれる表記も）にわかれており、『古事記』では歌とナレーションの文体は異なる。『古事記』から『日本書記』、『万葉集』、『新撰万葉集』[3] まで様々な表記の試行錯誤をへて『古今和歌集』で確立したのである。したがって『古今和歌集』は、和歌

の歴史上、大変有意義な存在である。

『古事記』の韻文の書記言語で書かれた歌謡から（712年）『古今和歌集』（905年）の仮名表記で書かれるようになるまで193年経っているが、この比較的短い時期に数多くの韻文の文字化の試みが見られる。記紀の歌謡の音声式表記から『万葉集』の多数の表記ストラテジー、9世紀の末に成立した『新撰万葉集』[4]の表語・表音式の表記（正訓字を主体として万葉仮名を混えた表記法）をへて最後に『古今和歌集』の仮名表記に辿りつくのである。

記紀の歌謡では、文字とその音声価値はほとんど1対1で、文字は音声字母に近いが、『万葉集』では、歌謡の合理性はなくなり、韻文の表記の複雑さ、難しさは頂点に達した。『新撰万葉集』の場合、『万葉集』の表記に似てはいるが、それほど不規則、複雑ではなく基本的に漢字・万葉仮名式の表記である。訓字、万葉仮名、機能字、戯書などが見られ、音声列を文字化する努力が際立ってはいるが、『古今和歌集』の仮名表記からはほど遠い。また漢文的な表現も存在するがそれほど多くはなく、音声列に忠実でも欠けているところもある。しかし、音仮名、訓仮名、戯書などを使って音声列を書きあらわす編者の様々な工夫が見られる。『新撰万葉集』が書かれた時期は不明だが、大体9世紀の末だと考えられているので、時期的には『万葉集』よりも『古今和歌集』に近いが、仮名表記の例はみられない。しかし、『新撰万葉集』にも『古今和歌集』にも音声列を文字化する努力が目立つ。

このように、韻文の表記は紆余曲折をへて『古今和歌集』の仮名表記に辿りついたことが分かる。記紀の音声表記から遠回りをして、最後にまた音声表記に戻ったといえよう。直観によって理解した韻文の文字化から離れ、無理な方向に向かい、複雑さを増す一方の狭い小路に進んだ。その間漢文体の影響があったと考えられる。つまり、記紀の音声表記から最後の仮名表記に至るまでの複雑な表記は複数の説明ができるが、漢文を真似る意志があったことも考えられるだろう。もしそうであるなら、韻文における漢文の影響が特にみられるのは当然である。

五

韻文に使われる表記体は、概して、音声文字専用（万葉仮名）、表語・表音文字交り、表語文字専用の三種類に分けられる。文字言語学上、この三種類以外の分類は考えられない。また、漢字専用の時代に、漢字の用法による分類原理は、万葉集にある漢字の特別な用法は別として、次の二つに分けられる。

１．漢字の表語用法を文章表記の基本とする
２．漢字の表音用法を文章表記の基本とする

さらに、奈良時代の和歌の表記は次の２種類に分けられる。

１．和語（列島語）を漢字で書く。
　音声文字で書く→万葉仮名文体。これは言語を直接的に書く。→「言葉」を書く

２．和語（列島語）を漢文で書く。
　漢文訓読、変体漢文。これは言語を間接的に書く→「言語」を書く

『古事記』から『古今和歌集』まで上記の２種類が使われており、特に、『万葉集』は、最も韻文の多様性に富んだテキストと見なされている。その意味では『万葉集』は和歌の試験所と新しい意味づくりの試みの場と見ることができるだろう。韻文では、音声文字専用の時代が長く続き、古代の日本人は忠実かつ正確に昔の言葉を伝え、その言葉を真似て新しい歌を作った。情報伝達を中心にした散文とは違い、感性と美を表現する韻文は言葉を正確に伝え、それを読み手が忠実に再現することが大切であったと思われる。

漢字は音よりも「義」、意味が固定しており、読み手が正確に音声化しなくても意味ははっきり伝わる。それに反して、仮名は音声文字で意味は伝えにくいが、読み手にかなり正確に音は伝わる。語彙、韻律、気持ちなどを大事にすれば、音声文字に任せた方が確かである。そのため散文と違い、韻文は昔から純粋な大和言葉で書かれた。和歌は日本の純粋な精神を伝えるジャンルとして、列島に住みついた人々の言葉を使うのは自然の成り行きであった。

古代日本では多数の書記言語の形をとったが、韻文と散文の違いはあった。韻文は、日本人の精神から生まれたせいか、最初から漢文の影響が少なかったといえよう。『古今和歌集』で仮名主体になったとき、もちろん音声列に忠実に書かれるようになったが、それは仮名で音声列が全部書けたという理由もあるが、そうしなければ歌の意味が伝え損なう可能性が高かったからである。

『仮名序』に「人まろなくなりにたれどうたのことと〻まれるかな」とあるように仮名または万葉仮名など音声文字を使い、「ことのは」（言の葉）、つまり、語彙を書き表した。表語文字の漢字は一字に対して読み方が多数あり、一字で複数の語彙を表してい

る。音声文字は、同音異義語は別として、文字列は一語を表しており、語彙を重んじれば、音声文字の方が確かである。仮名で「言葉を書く」というのは、語彙で成り立っている音声列、つまり言語の単位を詳しく書くことである。それに反して、漢字で「言語を書く」というのは、意味のある部分だけを書き、意味のない部分は読み手に委ねられ補読される。したがって、「言語を書く」というのは、読み手に文字でメッセージを伝え、できる限りコンパクトに伝達するというストラテジーである。一方、和歌の音声列は日本語であるので、仮名で「言葉を書く」ときに、日本語の「語形」、つまり、「言葉の形」を優先することになる。「言語を書く」ことと「言葉を書く」ことの違いは、仮名表記は特定の言語、つまり列島語を書きあらわすのに対して、漢字表記は特定の言語ではなく、抽象的な言語、つまり意味・情報伝達の手段としての言語を書くことにある。

散文と違い、韻文の表記は最初から「語彙の表記」であり、途中迷いながらも最終的に最初の直感に戻り、語彙を書くことになったわけである。

表記は大きく次の２種類にわけられる。

１．言語的な役割を果たしている表記
　　文字は意味を持つか意味を示すものである。
２．転写的な役割を果たしている表記
　　文字は意味を持たず、示さないものである

意味があるか（または示すか）ないかによって区別できるが、抽象的な立場から見れば、１は漢字で、２は仮名、そして応用的な立場からいえば、古代表記は意味を持っているとも持っていないともとらえられる。漢字一文字で音節、語彙、形態、文節を表すことができるが、仮名一文字では音節、語彙、形態は表すが文節を表すことはできない。漢字表記（漢字のみの表記）は人麻呂の略体書きのように文節式表記法で、言語要素を詳しくは表わせない。漢字仮名交じり表記は分析式表記であり、ある程度言語要素を表す。仮名表記は、分析式表記であり、ほぼ完全に語要素を表す。小林賢章は「音列（文）を表記しようとするときその音列をどんな単位で認識するかにより表記面に差がでてくるという立場である。音列を音節（拍）単位で意識すれば、表記面は仮名表記となり、単語単位で意識すれば漢字仮名交じり表記になり、文節単位で意識すれば、漢字表記となるというわけである。」といっている。[5]

六

訓読みがまだ完全に定着していなかった奈良時代には、漢字で語を書き表していたが、これは「語彙表記」とはいえない。語彙を完璧に表すのには、やはり仮名表記しかなかった。『古今和歌集』の時代には、修辞上の独創力の富んだ『万葉集』の多様な訓読みの時代が終わったといっても、その影響が完全になくなったというわけではなく、韻文における訓読みはまだ確立しておらず、安定していなかったといえる。『古今和歌集』のころ編纂された辞書『新撰字鏡』と『倭名類聚鈔』には字訓を定める必要があると書かれている。平安末期の『類聚名義抄』には漢字一字に和訓が多く並べられている。

平安初期の和歌の仮名表記は「語彙」を正確に文字化する手段であったと言える。仮名表記は言語を離れて、ただ音声列を表し、音列の語彙を正確に伝えようとした。また、情報を伝える手段としてではなく、語彙を正しく伝える方法として生まれたのではないだろうか。和歌の仮名表記は平安初期から末期まで形を大きく変えた。初めは仮名のみで、異体字が多かったが、時間が経るにつれて文字体は固定していき、異体字が少なくなった。そして、漢字仮名交じり体が優勢になっていき、漢字の使用比率が増え続けていった。[(6)]『元永本古今和歌集』はその典型的な一例である。

韻文の表記の変遷をみると、『万葉集』の複雑な表記から『古今和歌集』の簡略化された表記へと変化していったのである。これは韻文の表記の歴史上、最も画期的ことではないだろうか。しかし、これは、ただ表記上の変化なのか、あるいは、表記を伴う和歌に変革が生じたのであろうか。「変革」というより表現の簡略化といったほうがいいだろう。修辞法がもつ文字の多様な意味合い、ニュアンス、掛かり合い、含意などを放棄し、掛け詞、縁語などよりシンプルな語彙レベルの技法にゆだねるようになっていったのではなかろうか。『古今和歌集』がもたらした表記革命は実はもっと深いレベルの発展を示すものなのではないだろうか。和歌の観念が変わり、新しい時代の感性の象徴にもなる新生文学（日記・物語）とともに、散文と韻文の区別をなくし、歌物語の誕生以降、表記は「ことば」を書くという新しい発想が生まれた。

大陸からの模倣から離れ、日本の優雅的な素朴さ（naive）（「すなほ」）を表現する素朴な文字で書かれた文学作品が生まれた。その作品では、視覚的な美しさは複雑で、学問的な文字に置くのではなく、むしろ、しなやかな文字の形にあり、その形のアピールは落ちついた素直な優雅さにある。藤原定家の歌論集『毎月抄』に「但、心詞の二をともにかねたらむは、いふに及ばず、心のかけたらんよりは、詞のつたなきにこそ侍らめ」

とあり、言葉の巧みさよりも「心」、つまり感情の方が和歌には大事であると言っている。(7)

注

（1）Pollack David, The Fracture of Meaning : Japan's Synthesis of China from the Eighth Through the Eighteenth Centuries, Princeton University Press, Princeton, 1986, p.15.

（2）『古事記』で太安万侶は早くからこの問題に取り組み、「然、上古時、言意並朴、敷文構句、於字即難。己因訓述者、詞不逮心。全以音連者、事趣更長。是以今、或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓録」と書く。

（3）「菅原道真によって編まれたといわれる新撰万葉集は、万葉集と古今集との間に成立した歌集として和歌史の上で重要な資料の一つである。」（乾善彦、「新撰万葉集の和歌表記とその用字の一特徴—表記史の一視点から」、「文学史研究」24　1983年12月、1頁。）

（4）契沖の元禄版に従う。和歌は242首を真名で書き、左傍に漢詩の七言絶句が配されている。ここでは和歌のみ取り上げる。

（5）小林賢章、「新撰万葉集の表記」、宮地裕（編者）、『論集　日本語研究（二）　歴史編』、昭和61年、459頁。

（6）小松英雄、『仮名文の構造原理』、笠間書院、2003年、5頁。今西裕一郎氏によれば、漢字（平均）使用比率は、平安後期=1.5%、鎌倉期=5.1%。(今西裕一郎「「表記情報学」事始め—序文にかえて」、「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究Ⅰ」、人間文化研究機構、国文学研究資料館、2012年、15頁。

（7）久松潜一、西尾実（編）、『日本古典文学大系65　歌論集・能楽論集』、岩波書店、1960年、130頁。

科学研究費補助金基盤研究（A） 2012 年度研究成果報告書　課題番号［22242010］

「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」

The project for establishing the foundations of
"Methodology for the studies of the notation"in the classical Japanese literature

研究代表者　今西裕一郎

第Ⅱ号

2013 年●●月●●日　発行
〈非売品〉

発行所
人間文化研究機構　国文学研究資料館
〒 190-0014 東京都立川市緑町 10-3
TEL：050-5533-2900

編集
国文学研究資料館　今西裕一郎

印刷所
●●●●●